

令和5年度新潟市文書館企画展

新潟のチラシ

ひきふだ ～引札から百貨店広告まで～

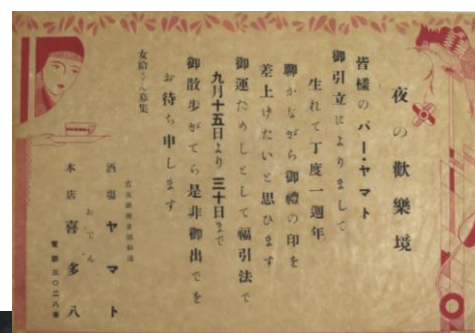
■はじめに

わたしたちは毎日、商品広告やそのほか様々な種類のチラシを目にしています。このようなチラシの歴史は、商品生産が活発になった、江戸時代中期頃までさかのぼります。

今回の企画展では、文書館所蔵資料の中から、過去から現在までの多種多様な新潟のチラシを紹介します。明治期以降に盛んにつくられた華やかで美しい意匠が特徴の引札、新潟の街の賑わいの中心であった百貨店のチラシ、かつては娯楽の中心であった映画館のチラシなどを通して、当時の街の様子や人々の生活に思いをはせてみましょう。



昭和20年代頃 小林百貨店（当館所蔵）



昭和31年 夜の古町通六番町（当館所蔵）



昭和34年 正月の西堀（榎谷小路を挟んで手前が4代目市役所庁舎、奥が小林百貨店）

小林百貨店の電飾に照らし出されているのは、グランド劇場で公開中の映画「十戒」の絵看板（当館所蔵）

引札の世界

■引札のはじまり

引札とは、商店が開店や商品売出しを宣伝するために配られたふたで、現在のチラシ広告にあたるものです。引札という言葉は江戸時代中期頃に生まれ、その語源は「お客を引く」、「引き付ける」、「配る（引く）」など諸説あり、江戸では「引札」、京坂では「ちらし」と呼んだとされています。

引札は商業活動が活発化した18世紀末から19世紀初めにかけて盛んにつくられるようになりました。

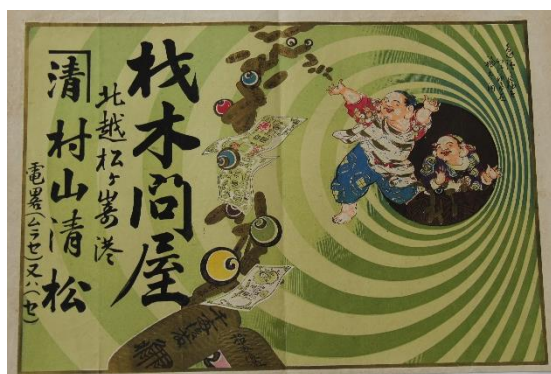
また、平賀源内や山東京伝などの文人がその名声と文章力を買われて広告文を作成することもありました。明治初期頃までは、薬や化粧品、呉服関係の引札が目立ち、どちらかというと効能や宣伝文句などの文字を主体としたものが多かったようです。



明治10年代の太田胃散の引札（当館所蔵）
薬の効能、用法や値段などが記されている

■近代以降の引札

明治期から大正期にかけて、錦絵の技法を取り入れた正月用の引札が流行し、各商店が正月の挨拶とともに得意先へ配るようになりました。図柄も様々なものが登場し、客の関心を引きつけるための華やかな色彩と大胆な構図、巧みな宣伝文句などは、今もなお見る者を魅了します。このように鮮明で華麗な引札が盛んにつくられるようになった



大正期の材木問屋の引札（当館所蔵）

背景には、木版印刷から、銅板印刷や石版印刷へと、印刷技術の進歩がありました。しかし、新聞が各地で発刊されるようになり、折り込み広告や掲載広告が一般的になるにつれて、引札はだんだんと姿を消していきました。

古町地区の百貨店①

■百貨店競演

人々に惜しまれながらも閉店した大和新潟店（平成 22 年閉店）、新潟三越（令和 2 年閉店）は新潟を代表するデパートでした。

大和の前身は「万代百貨店」と言い、地元の商店主たちが東京の百貨店などの協力を得て開業しました。三越の前身は「小林百貨店」と言い、地元の小林呉服店が創業しました。

新潟の目抜き通り柁谷小路を挟んで、両百貨店が開業したのは、昭和 12（1937）年 9 月です。どちらも開店初日には多くの人押し寄せ、『新潟新聞』は「新しいもの好きの市民殺到」、「どこもかしこも人波」の見出しで、その盛況ぶりを報じました。

市内初の 6 階建てのビルディング、エレベーター、流行の商品、華やかな店内装飾、百貨店はそこだけ都会の雰囲気漂っていました。両店とも 5 階に催事場があり、「国民精神総動員作品展」や「支那事変写真展覧会」などの時局がらみの展覧会、「新潟工芸展」や「商業美術展覧会」などの美術展も見ることができました。昭和初期には古町通中心部が市内で最も繁華な商店街でしたが、百貨店の開業により、古町へ一層客が集中するようになりました。



新潟ビルディング（古町六番町）で営業していた頃の小林呉服店のチラシ（当館所蔵）



昭和 30 年 新潟大火前の大和新潟店（当館所蔵）



昭和 30 年代 新潟大火後の小林百貨店（当館所蔵）

古町地区の百貨店②

■万代百貨店から大和新潟店へ

万代百貨店の売り場の内容は小林百貨店とほぼ同じでしたが、高級呉服類以外は、すべて東京から仕入れたものでした。万代百貨店はサラリーマンや「中産階級」の人々を相手に商売をしたいと言っていました。昭和14(1939)年に金沢市の丸越百貨店に経営が移り、18年に本社丸越が大和となったのに伴い、大和新潟店と改称しました。

昭和30(1955)年の新潟大火後、増改築を含めた復旧工事を進めました。昭和32(1957)年、メリーゴーラウンドや空中電車などを備えた「屋上プレイランド」を開設し、屋上は子供や若いカップルでにぎわいました。



昭和43年頃 大和店内の様子(当館所蔵)



昭和41年 人々ににぎわう屋上プレイランド(当館所蔵)

■小林百貨店から新潟三越へ

小林百貨店は洋品・食料品・洋服・呉服・家具・貴金属などの売り場の他、喫茶店や食堂・催物場・遊園もあり、屋上からは市内が一望できました。夜には屋上の広告塔から1階のショーウィンドウまで貫く、朱と緑の6本の電飾が輝きました。

昭和30(1955)年の新潟大火後、小林百貨店は映画館に力を入れ、すでにあった「小林映画劇場」に加え、昭和32(1957)年2月に洋画封切館「グランド劇場」を館内に開設しました。落ち着いた雰囲気劇場は、映画ファンに好評でした。昭和55(1980)年2月、小林百貨店の経営は三越へ移り、新潟三越と改称しました。



昭和30~40年代頃 小林百貨店のグランド劇場(当館所蔵)

万代シティの誕生

■万代シティの誕生

流作場の萬代橋東詰周辺は、かつては新潟交通の車庫や工場・バスステーション、自動車の整備工場などが立ち並ぶ、自動車の町でした。この町が、昭和40年代後半から大きく変化していきました。

昭和48（1973）年11月23日、大手スーパーのダイエーが地上6階、地下1階の万代シティビルに開店し、当日は入場制限をしなければならぬほどの人が押し寄せました。同日に、新潟交通本社とテナント店などを収容したバスセンタービルと、高さ100メートルのレインボータワーも開業し、「万代シティ」が誕生しました。

周辺には既に昭和46（1971）年にはミナミプラザ、47年にシルバーボウルが開業しており、50年に万代シルバーホテル、59年に新潟伊勢丹、平成7（1995）年に新潟ジョイポリス、8年にビルボードプレイスと、大型施設が次々に開業していきました。



昭和48年 開業当時のダイエー（当館所蔵）

■古町から万代へ

万代シティの誕生は新潟県内の商業に大きな影響を与え、昭和50年代以降、大型ショッピングセンターが郊外や中心街に進出することとなりました。市内中心部では、昭和51（1976）年には日本海側初の都市型地下街「西堀ローサ」が開業し、古町通や本町の商店街は全天候型のモールを設けました。

また、高額商品を購入する場所は、それまで古町通や本町でしたが、昭和61（1986）年の調査から万代シティの方が多くなりました。歩行者の数も、平成元（1989）年からは古町通七番町よりもダイエー前の方が多くなり、人々の流れも変化していくこととなりました。



昭和60年 古町モール（当館所蔵）

写真で見る街の移り変わり



年代不詳 古町通四番町 (当館所蔵)



昭和42年 古町通五番町 (当館所蔵)



年代不詳 砦谷小路周辺の様子 (当館所蔵)
左側に大和新潟店、右側に小林百貨店屋上が見える



昭和50~60年代頃 砦谷小路周辺の様子 (当館所蔵)
中央奥に新潟三越、右側に大和新潟店が見える



昭和48年 空から見た開業当時の万代シティ (当館所蔵)
中心部に見えるのは平成30年に解体されたレインボータワー



昭和63年 万代シティ周辺の様子 (当館所蔵)
左側にダイエー、右側奥にシルバーボウルが見える

新潟の映画館のチラシ

■映画の発展

新潟市に活動写真の常設館（大竹座）ができたのは大正3（1914）年のことです。その後次々と常設館が開館しました。それまで主に劇場や寄席で上映されていましたが、活動写真の人気とともに閉館や活動写真館に改築されることが多くなりました。大衆娯楽の中心が、芝居から映画へと移ったのです。

世界最初の映画は1888（明治21）年にルイ・ル・プランスが生み出しました。映画は、「サイレント期（音声・音響、特に俳優の語るセリフが入っていない）」と呼ばれる時代に成熟し、1920年代末に発声映画（トーキー）にとって替わりました。

常設館以外での活動写真の最初の上映は、明治37（1904）年といわれています。

活動写真館の建物は当時としてはとても立派で、ハイカラな感じだったようです。そして、昭和30年代に映画の黄金時代を迎えます。



大正14年公開 「鞍馬天狗」ほかのチラシ こんびら館（西厩島町）

こんびら館には、大正13年に主演の尾上松之助が来館している（当館所蔵）

■サイレント映画

サイレント映画の時代は、弁士がとても人気がありました。各映画館に専属の弁士がいたのです。弁士の口調に合わせて技師が手でフィルムを回しました。「さて皆様、いよいよこれより、電気応用活動大写真の公開でございます…。」と得意の口上を述べてから映写になったそうです。

活動写真を初めて観た人々は、「写真が人間と同じように動く」と不思議だったようです。また、トーキーの時代になると「映像から声が出てくる」ことに驚いたといわれています！



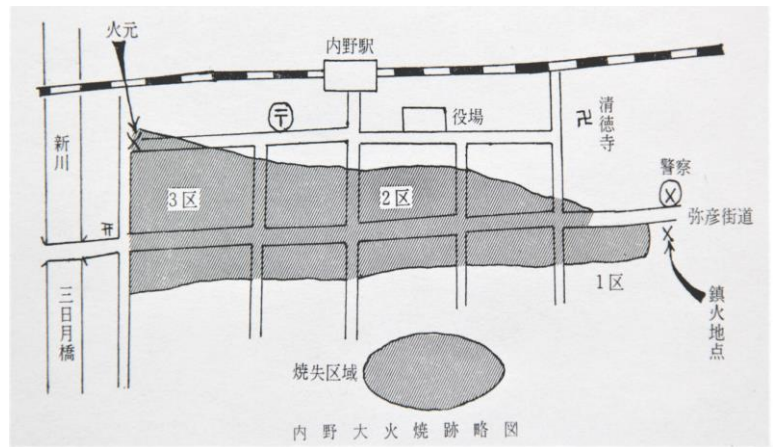
昭和11年公開 「孫悟空」のチラシ

オールトーキーを強調している（当館所蔵）

内野大火と復興チラシ

■大火の発生状況

昭和28（1953）年12月10日午後4時58分頃、内野町中央部の第3区細川材木店付近から出火。折からの風速13メートルの強風にあおられて、火はたちまち町の中心部に燃え広がり、大火となりました。大火の知らせを受け新潟市、新津市、巻町をはじめ最寄りの市町村から応援の消防車が総出動して消火に当たりました。また、県からの要請により新発田保安隊（新発田駐屯地）も出動しましたが、道路の狭さや水の便が悪いことにより消火活動が難航し、内野農協、第四銀行内野支店などの公共建物を全焼しました。消火活動は、延焼を防ぐために建物の破壊作業によって同日21時20分ようやく鎮火しました。



大火による焼失区域『新潟市合併町村の歴史 第1巻』より転載

■火災発生からの応急対策

新潟県はこの大火に対し災害救助法を発動し、内野町役場に現地対策本部を設置しました。

- ◎医療衛生（医師4名、看護師8名の救護班が負傷者の治療に当たる）
- ◎救護物資（毛布1300枚余り、外套16枚、ズボン80着、布団など）
- ◎食糧（隣接の坂井輪、中野小屋、赤塚3村に各500食の炊出し要請）



大火後状況を伝える写真

『新潟日報』昭和28年12月12日付夕刊（当館所蔵）

罹災者の收容は内野小学校（越後線を挟んだ高台に位置し被害を免れた）となり、炊き出しなどの食糧配布が行われました。

■火災からの復興

火災発生の日、12月11日はあいにくの雪でした。しかし、早期の復興を必要とする槌音は高らかに進められました。全焼した第四銀行内野支店は、11日中に仮建築を建て終わり、12日には営業を開始したと言われています。避難所となった内野町立内野小学校では、早くも12日から授業を再開したそうです。驚きの早さですね。

また、古俣文吉町長は「町の中心部が全焼した痛手は大きいですが、バラック建てでも店を開きたいと願う商店の建設復興に全力を尽くすつもりである。」と所見を發表しました。

新潟県は、内野大火に対して、法律施行後初めてとなる災害救助法を発動しました。岡田県知事は、政府に援助物資を依頼、町の再建にあらゆる努力をすると表明しました。見舞金は被害に遭った各家庭へ6万円配布されると、『新潟日報』（12月12日夕刊）で報じられています。その後、内野町を近代的農村都市に再興するために都市計画がつくられ、内野四つ角を通る新潟～弥彦線の幅員は5メートルから18メートルに拡幅されました。

キーボードを打ち続けた郵便局員

降り注ぐ火の粉、逃げ惑う町民たちの叫び声が聞こえる内野町、そんな中、冷静に職務を遂行する人々がいました。内野郵便局では、局長の指揮のもと、ケーブルが焼け切れるまで電報・電話を送ろうと一人も逃げ出さず、キーを打ち続けたと言われています。

奉仕作業をした小・中学生

内野小学校の児童の罹災者は53人、職員は2人いました。

小・中学校の職員と児童生徒は12月11日より3日間、全員で奉仕活動を行ったそうです。

旧内野町について

町制施行…昭和3（1928）年

当時の人口…約10,700人

当時の世帯数…1,850世帯

※昭和35年1月11日新潟市と合併



昭和29年 新築の地ならし風景（当館所蔵）



昭和29年9月 大火翌年の復興祭（当館所蔵）